

1 石田 満先生を送る (松尾)

石田 満先生を送る

松 尾 英 夫

石田満先生がこの春、白鷗大学をご退職になった。

先生は、北海道大学大学院法学研究科修了後、北海学園大学経済学部・法学部専任講師を経て、昭和四〇年四月上智大学法学部助教授になられ、同教授、同大学院法学研究科委員長、同名誉教授を経て、平成九年四月本学法学部教授になられ、大学院法学研究科長を経て今春ご退職になった。

この間、昭和四二年一二月には、法学博士（北海道大学）の学位を取得され、同四五年九月から一年間ドイツ連邦共和国ボン大学客員教授を務められたほか、平成九年一月から中国華東政法学院経済法研究中心顧問を務めておられる。先生が本学に関係されるようになったのは、平成二年ころである。折しも本学の創始者である上岡一嘉初代学長のもと、「国際的に活躍できる人材の育成」を教育の目的として、二一世紀の新しい法学・政治学教育を担うことを目指して本学に法学部の開設が企画され、石田先生もこれに参画され、ひとかたならぬご尽力をくだされた。その結果、平成

三年一二月文部省認可を得て、翌四年四月本学に念願の法学部創設が現実のものとなったのである。そして、先生は、法学部創設と同時に兼任講師になられ、同九年四月から商法関係担当の専任教授になられた。

その後同年秋ころ、本学に大学院法学研究科の開設が検討され、またもや、先生が中心となつて、その開設準備を担当されることとなった。大学院法学研究科開設の準備に当たっては、文部省認可申請の事前調査の段階から、資料の収集、企画、立案、そして認可申請作業に至るまで、心血を注ぎ、身を碎き、並々ならぬご尽力をされた。その結果、文部省認可を得て、平成一一年四月本学に待ち望まれていた大学院法学研究科が創設されたのである。先生は、短期間に法学研究科創設を成し遂げられた。そして、大学院創設と同時に本学大学院法学研究科の初代研究科長に就任され、その後二年間、法学研究科の充実、発展に尽され、そして、今春めでたく本学の法学修士第一期生を送り出すことができたのである。

先生は、正しく本学の法学部および大学院法学研究科の礎を築かれた方である。

そして、先生は、教育の場面においても、学部生に対しては、「法律学は理論的学問であると同時にその多くは実証的学問であるから、絶えず社会とのかわりを考え、豊かなセンスを養うべきである。」と説かれ、また、大学院生に対しては、「学問への飽くなき探求心と知的好奇心をもつて処すべきである。」と説かれ、本学法学部、大学院法学研究科を通じて、学問に対し情熱をもつて、また、ドクターとして高いレベルの講義やゼミナール教育をされ、学部生、大学院生に深い感動を与えられた。

また、研究の場面においても、幾多の優れた業績を残され、学問研究に多大の貢献をされた。すなわち、商法に関する多くの著書を発刊されるとともに、保険法に関する多くの著書・学術論文を発表され、今や我が国の保険法の権威

として揺るぎないものとされたのである。

もとより、教授会においても、豊富な経験と高い識見をもってリードされ、本誌の編集、本学法学会の研究発表においても、率先して自ら実行され、その活性化に寄与された。これらを通じて、石田先生は学生および教員に多くの学恩を与えてくださったのである。

さらには、学界や社会の場面においても、日本私法学会、日本保険学会など多くの学会、審議会などにおいて、数々の要職を務められるとともに、弁護士として今もなお活躍しておられる。

最後に、私的な場面においても、先生は好きなお酒の場を通じて、しばしば豊富なご経験に基づき、教員、学生とざくばらんに語り合い、コミュニケーションを図るよう努めておられた。

このように、先生が、本学の法学部および大学院法学研究科の礎を築かれるとともに、教育者として、はたまた研究者として幾多の優れたご業績を残され、教育、研究に多大の貢献をされたことに対し、深く感服するとともに、心から敬意を表する次第である。

石田満先生をお送りすることは、誠に惜しみて余りあることである。先生は、本学の教壇を去られた後も、学者、弁護士として、高い識見をもってその道をさらに開き、究めて行かれることであろう。

この上は、先生の末長いご健勝と一層のご活躍をお祈りするとともに、今後とも白鷗大学に対し、側面からご指導ご助言をいただきたくお願い申し上げる次第である。

ここに、惜越ながら、石田満先生を送るに当たり、法学部を代表して感謝と惜別のことをお贈りする。

(本学法学部長)